

大阪における観光案内人の出現（上）

小田 忠

序

最近「旅館」という言葉を耳にすることが少なくなった。温泉旅館は旅の情報番組で有名旅館から秘湯の宿（旅館）に至るまで紹介され、今なお健在である。同じ旅館という言葉だが「連れ込み旅館」と言われる旅館がある。これは「連れ込みホテル」とも呼ばれ、男女が昼間・夜間に利用する。最近では「ラブホテル」あるいは「ラブホ」の名前で知れ渡っている。「連れ込み旅館」は温泉マークの逆、逆さクラゲとも呼ばれている。

昭和三十年代（一九五五～一九六四）には、大都市圏以外にも「旅館」は利用されていた。昭和四十年代（一九六五～一九七四）以降ビジネスホテルがぼつぼつ増加していくことになる。財団法人社会経済生産性本部が出版した、二〇〇七年の『レジャー白書―余暇需要の変

化とニューツーリズム^①』所収（ホテル業の市場規模の推移）の統計によると、平成三（一九九一）年に旅館市場が三兆五千億円でトップの座をしめるものの、平成四（一九九二）年以降は三兆一千億円、平成八（一九九六）年は二兆八千億円、平成十二（二〇〇〇）年には二兆二千億円、平成十六（二〇〇四）年には一兆九千億円と減少している。逆にホテル市場（リゾートホテル・ビジネスホテル・シティホテルを含む）は平成三年に九千億円、平成八年は一兆円、平成十二年・平成十六年は一兆円と横ばいである。

ホテルの利用を宿泊に限定し、食事などは近所で済ませば安上がりであるし、スーパーの食品売り場で購入してホテルで食べても同じことである。大手スーパーを初め中小スーパーも中小都市に展開し、食に困ることはない。最近の傾向はコンビニエンスストアなどで食品

を買う人が増加している。

これはビジネスマンが食事を安価に済ませることから利用が広がった。都市の大ホテルは、通常商用や旅でも利用しない。リゾート地のホテルと事情が違ってビジネスホテルは、商用でも遊びでもよく利用される。

最近、デフレ状態から脱却できず、旅館はますます苦しい立場に追い込まれている。従前のように食事などの配膳や布団の上げ下ろしをする仲居さんの給料、厨房にいる料理人の給料、ちよつとした旅館ならバー、カラオケルーム、ゲーム等に必要な人員の給料を削減し、宿泊だけの金額で温泉や名所を楽しんでもらうスタイルに転換を余儀なくされた。それならば、家族だけか混雑時あるいは繁忙時のみパートの応援を頼めば旅館を運営することができる。旅行者も安価に、旅館側も建物の提供だけで済ますことから人件費がかからない。

奈良時代以降、坊舎から木賃宿、そして旅館（旅館）へと発展してきた。当初は宿泊のみで、宿泊者は木と米を持参していた。木賃宿の発展・分化により、次第に食事を提供するようになった。必要に応じて副菜や酒・醤油・酢なども販売されていた。天皇や公家が社寺参詣をする場合には、炊飯道具や食材を携行している。江戸期の参勤交代においてもお殿様の食事を調理する炊飯道具を携行していたのと同様である。草津本陣の場合、関札は宿泊する大名が持参している。本陣側で賄の一切を任す場合（本陣賄）で、関札には「泊」といい、持参した炊飯道具で自分たちで賄をする場合（自信賄）、関札では

「宿」ということを示す。それ以外に「休」が昼食休みである⁽²⁾。

「坊舎から木賃宿、更に旅館」への発展過程では、旅館が左記のサービスを獲得していき、地域に知られるまでには、年月を必要とした。現在のホテル・旅館では、七以外のサービスは行っている。

- 1 食事を提供できるか、合わせて酒も出せるのか
- 2 温泉施設の有無（本来は湯治と神仏の関係がある）
- 3 サービスの一環として土地の名物を客に出せるのか
- 4 土産物を提供できるのか
- 5 地域の名所へ案内してくれるのか
- 6 各「講」への参加をしているのか（江戸・明治期は、浪花講・三都講・東講・真誠講・一新講などがあつた。今は、日本観光旅館連盟⁽³⁾、国際観光旅館連盟⁽⁴⁾、全国旅館・ホテル生活衛生同業組合連合会⁽⁵⁾）
- 7 関所手形の発行が可能か
- 8 書状や荷物の預かり及び発送が可能か
- 9 両替ができるのか

木賃宿から旅館へと発展していく過程で、右のサービスを取り込んでいき、客の満足度を高めリピーターの増加につなげる。このことが重要で、宿が生き残っていく唯一の方法でもある。これらのサービスあるいは事業を整えていかなければ宿の看板は存在しないのも同義で

ある。中井家・鴻池家・三井家に限らず商用で街道を往来する商人は、宿場に宿泊する旅籠は何軒もあり、常宿として利用している。体調不良を起こす事、足を痛めて予定の時間に到着出来にくいことを考慮して、宿泊場所を決め、できるだけ常宿に投宿するようにした。

一、観光案内人の出現

「浪華組道中記」天保十五（一八四四）年松屋源助

右の三切れ本は、旅が珍しくなくなり、女性も含めて旅が一般的になった天保十五年辰二月に出版された。発起人であるまつや源助は、浪華講の元締めである。パートナーは、講元の松や甚四郎。「浪華組道中記」の序文に「江戸では、嶋や藤兵へに案内を頼むべし」、はじめての江戸入りは、不安なものである。仕事が終われば見物もしたいし、土産も購入しなければならない。この記述は百人力、千人力の効果があったと思われる。〈諸商人仕入方諸見物何事も都合よろしく八案内賃定一人まへ三百文ツ、〉京都においても似た文言で浪華講の定宿先を紹介している。

かめや吉兵へ、井筒や徳兵へ、扇や庄七。〈諸商人仕入方六条井所々御参詣格別都合よろしくその外諸事浪花組の定有右かめや井筒屋両家と案内賃銭定〉

東山案内賃 二百五十文

西山案内賃 三百文

案内賃の違いは、よくわからない。

また、奈良には小刀や善助がいて、〈案内者右小刀や二て頼べし〉賃六十四文と少ない。

南都の寺社は離れていて、多くを参観することができないため、近所の寺社を二三見て廻るぐらいだが、宿屋が案内人を雇用して、客の要望に応えようとしている。日本を代表する三都市では、案内人を専門家に仕立て上げて営業のひとつとした。案内賃を出し惜しりする者に対して一人で名所旧跡を訪ね歩けるような一枚刷りが作成されている。本屋仲間が許可したのではなく、多くはサーピスの一環だが私家版として宿屋などが色刷りで作成して配布した。これらの一枚刷りは絵図で、方位は存在するが、縮比はない。「独り案内」と称し、道行き交う人や佇む人に場所を聞きながら目的場所を探し当てたことだろう。

「難波巡覧記」天保十二（一八四一）年河内屋太助には、〈遠境の人の大坂見物の為に案内人のかかりに用ひ〉とあり、初日（三十か所）二日目（二十七か所）三日目（十六か所）四日目（三か所）全部で七十六か所の名所を選んでおり、本人の好きな場所へ行くような形になる。遊び場所の記載にぬかりなく、遊所として、新町・九軒町・島之内・坂町・堀江・北の新天地・難波の新天地・この外所々にあり、大阪市中には、小さな遊所が三十か所程あったと言われている。芝居は、道頓堀・座間社・稲荷社・天神社・堀江・御霊社としている。道頓堀に歌舞伎・浄瑠璃などがあり、全国的に知れ渡っている。神社で

大道芸などが安い値段で見ることができ、高津神社・生魂国神社でも演じられていた。見世物も同様で、難波新地はよく知られているが、諸社でも行われていた。能については北の定舞台、角力は難波新地で開かれていた。

大阪の出版組合から出された形跡がない「浪華名所独案内」は、多色一枚刷りで、二百程の名所・神社仏閣を記している。有名な商家として鴻池屋・平野屋・天王寺屋・岩城屋・大丸・三井越後屋を選び、朱座・米市・青物市、娯楽としての遊郭・芝居・角力・見世物、桜の名所として天保山も紹介されている。道に色を付けて、時間に余裕のある人、時間のない人と区別して参考になる道順を提供している。

「独り案内」の言葉通り金を惜しみ、時間を持ち、探究心がある人のために一枚刷りや三切本が発行され、サービスとして提供したものである。「独り案内」の言葉の裏には、案内者が存在したことになるまいだろうか。案内者がいなければ、わざわざ「独り案内」と断る必要はない筈である。案内者がいなくても見物ができることを暗示している。

二、参勤交代がもたらした効果

親藩や譜代、外様の区別はあっても在府時、江戸の人口は膨れ上がる。諸国から参勤する者たちの江戸見物や土産物の購入者も多くいた

が、先輩や先に在勤していた者から有益な情報を聞き出し、失敗のない江戸見物・江戸買物が行われた。経済的・人的な問題もあり、いつ江戸に勤務を命じられるか分からないために一生に一度の思いが強い。彼らは案内者を頼まない。その代り先輩たちが江戸を案内してくれた。宿に宿泊しない家臣に案内者との接点は薄い。

参勤交代により、街道筋とりわけ宿場は発達した。西国三十三か所・伊勢参り・金毘羅・観音巡りなどへ熱心な信者が宿場に宿泊しながらご当地の名所巡りをしたことは、簡単に推察できる。

宿屋が純然たる木賃宿として運営している場合と、食事や酒・土産物などの付加を高めた宿、更に案内者を置き、宿泊者のサービス向上を考える宿、書状などを預かり飛脚問屋まがいの事をやる宿、通行手形を発行する宿が現出したのは、旅人が困り、不安な道中がないように考えた。旅人の困難を打開する為に宿が考え付いたサービスである。あくまで利益を求める良心的な宿といえる。一方、飯炊き女が二名まで置ける幕令を遵守し、宿泊客に売春をさせ、利益をあげていた宿もある。勿論、飯炊き女は一宿に二名までは定法通りであるが、概して二名以上の女を置く宿もあり、飯盛旅籠屋の設置を企図した例は、枚挙にいとまがない。

それは旅人誘致策であるが、後には飯盛旅籠屋も平旅籠屋と同じく次第に外部の旅行者よりも宿内外、特に助郷村々の農民を対象とするようになり、宿・助郷間の紛争に発展した。

しかし、宿駅が繁栄していくには必要悪だった、と「交通史」(体

系日本史叢書²⁴）は述べている。

山地にある一軒宿や僻地の宿では、両替をしながら旅を続けることになる。両替は旅行者にとって必要な事。（江戸時代は相対だから、宿の主人と旅人が話しをして決めるが、納得しない場合は、銭を購入した時の銭相場か宿泊時の相場場で話しあうが、よい方法は旅人がもたらず銭相場、近隣の相場所からの「相場表」を参考にすること。）旅行中銭が不足するから、金貨か銀貨を出して銭を買う。宿泊代は、基本的に銭極である。

たとえば、近隣地域で銀一匁が銭百二十文だったら銀拾匁であれば銭一貫二百文になる。宿の主人が銀一匁で銭百十文の相場で銭を買った場合、銀十匁では百文の儲けである。旅人が銭がなく困っていても相対だから宿屋の言い分が通る。何しろ銭がなくては宿代・駕籠代・茶代・餅代にも困ることになる。

参勤交代で江戸に到着した勤番武士はどのように過ごしたのであるうか。酒井伴四郎の日記から拾ってみる。「単身赴任下級武士の幕末『江戸日記』」林英夫校訂、(『地図で見る新宿の移り変わり 四谷編(新宿区)』)

六月朔日

朝又森川え行薬賣夫ヨリ大名小路え行諸大名之屋敷一見致余り暑き故照り降り傘吉本叔父様と買又大名登城下り見物ニ参り

七月十三日

四ツ谷へ行直二帰り昼拾文之蛤買有之候間夫二而酒盃吞候処蛤

も不塩梅酒も不吞大二貧ほふ

八月廿五日

今朝ヨリ少々鼻垂風故そば屋え這入皆之様茶碗盛うどんを喰予者薬代り二蛸永芋連根之甘煮二而酒二合吞候又明日も薬代り二一盃吞候

伴四郎は酒が好みで、薬代わりに酒を飲む性格だった。食事は蛤以外では、すしやそば・うどん穴子の甘煮などを食べ、大名の邸宅を見物し、浅草のおばけと寄席・芝居・虎見物、吉原のいらん道中と両国、飛鳥山・愛宕山、庭園都市を楽しんでいる。更に江戸・横浜異人見物と好奇心旺盛である。

江戸での生活は比較的自由なものであったが、通常藩士たちには藩邸からの無制限な出入りは許可されていなかった。私用で外出する場合は許可が必要で、『江戸お供の記』¹⁾の土佐藩のある藩士は、月に五回から十回に及ぶ外出をし、三か月で二十八回も外出している。

そのことを『日本人と参勤交代』²⁾の中で述べている「単身赴任下級武士の幕末『江戸日記』」で酒井伴四郎は月に七〜八回は藩邸外で食事をしてきた。私用であるが名所見物、寺社参詣、買物、その他の用事を含めると一か月で十回を超える外出をしていた。

三、観光案内人の発生

伊勢の御師は、江戸時代以前から栄えている。羽黒山の宿坊でも千

年の歴史がある。富士山も立山も古くからの信仰者が多く、毎年参詣に訪れる人々のために、宿坊を提供し、土産物の準備、泉源のある場所では湯治もあつたし、参詣者は温泉に入るのも大きな楽しみである。また、御師は山内の地域や神社の案内をしていた。

参詣に訪れる人たちも時代によって変化があり、熊野では平安時代に貴族達を先達し、鎌倉時代は武士達を取り込み、室町時代には一般町人が参詣に訪れた。

石山本願寺時代の寺内町の規模は不明だが、信長時代に灰燼に帰した地に秀吉は、大阪城を築城することになった。それでも諸国が戦乱の中、旅を通じて寺内町を見学しようとする奇特者にお目にかかることがない。この時代には、危険な地域への観光もないが、日本古来の山岳宗教である修験者達の宿坊に宿泊し、社寺を参詣し、霊験あらたな話や、土地の土産物を求める。「信仰」という言葉で結ばれた心のあり様は、たとえ危険が高まるうともその場に分け入ることになる。

伊勢の御師が観光地を案内することは、古くから行われているが、身分は、観光案内人ではなく、御師という立場を忘れてはいない。彼らが一番望んでいるのは、毎年宿坊に宿泊してくれる檀家である。彼らは、伊勢の地にお金を落としてくれることにある。伊勢の観光案内や送迎、饗宴はその一環であり、檀家を伊勢の地に導くために、伊勢御師は、「毎年太夫殿から御被箱に鯉節一連、はらや一箱・折本のこよみ・正真の青苔五抱、かれこれこまかにねだん付て、式刃八分がもの申請て、銀三刃御初尾上れば、高で式分あまりて、お伊勢様も損の

ゆかぬやうに、此家三十年仕来つたに、そちに世をわたしてから、銀吉枚づゝ上らるゝ事、いかに神の信心なればとて、いはれざる事也。」父親が息子に対して、そんなにお初穂をしなくても十分得をしている、ことを暗示した言い方で、ましてや「お前に相続してから銀一枚（銀四刃三分）をあげられることは無駄だという。」これらの出来事は西鶴が「世間胸算用」伊勢海老は春の槍^⑧の本に書きとめている。

元禄時代には、伊勢の御師達が宣伝と勧誘を兼ねて来阪した。また、熊野先達も全国を檀那場に持ち、大阪にも檀那場が形成されていた。これらの御師達の立ち振る舞いを目先の利く大阪人が見逃す訳がない。

あちらこちらの場所で御師達の姿を見届け、彼らの仕事振りを聞きだし、日常的に来阪する御師達が故郷では、檀家をどのような接遇をしているのか、判明するまで時間はかからなかった。

御師は特に伊勢が有名であるが、出羽三山・立山・富士山・大山・熊野等の御師は各地域に旦那場を持ち経済活動を行っていた。中世の聖と変わっているのは、不特定多数の人を対象にした中世の聖と旦那場を確保した近世の御師とは決定的な違いがあった。

「東海道中膝栗毛^⑨」は、初編刊行が享和二（一八〇二）年、京都めぐりは文化四（一八〇七）年、同五（一八〇八）年に出版された。大阪見物が刊行されたのは文化六（一八〇九）年である。京都めぐりを見る限り案内人の存在を確認できないが、大阪見物では、長町に宿泊

した弥次郎兵衛・喜多八が大阪を案内してもらう為に、宿に依頼し、翌朝、案内人の佐平次が登場する場面がある。

ばんとう出て「コレ八おはやうござります。今日はどつちやへぞおしでござりますかいな。」

さよなら御案内のものおつれなさるがよござりましょ 弥次「ホ
ンニそれをおたのみ申やす ばんとう」畏りました。コレ 佐
平次どの、ちよとこんせ「トかつてよりあんないの男をよび あ
なたがたがあんないたのむとおつしやつてじゃ 中略 佐平次

「おしたくがゑいなら出かけましょよかいな 弥次「サア、はやく
めへりやせう ばんとう女ども」いてお出なされませ トこれより
三人打つれて、此やどを出かけて左平次「ナント斯いたしまし
よ。天王寺生玉は住吉御参詣のときに、おまいりなされ。けふは
こつちやのほうへさんぜうわいな ト長町どをりを北へひのうへ
より高津新地に出、まづ高津の御みやにまいる。こゝはむかし仁
徳天皇の、たかきやにのぼりてみればとゑいじ給ひし旧地にし
て、今にはんじやういふばかりなし。社内に、とうふでんがくの
ちや屋、さんけいの人をよぶ

四、修験者について

観光案内人の出自を修験者に求めるのは、ひとえに御師による旦那

場の形成、宿坊の利用、参詣者の増加、当地の魅力を増大させる為に
食事の工夫、新名物や土産の誕生、更に名所の確保が地域の魅力を増
やした。修験者による宿泊場所の安定化、これに温泉が加われれば（観
光地）と呼ばれるのではないか。

『熊野修験』『修験道儀礼の研究』『修験道思想の研究』『修験道組織
の研究』等の著書がある宮家準は、『修験道』の序で日本の修験道に
ついて語っている。

修験道は山岳を神霊・祖霊などのすまう霊地として崇めた我が国
古来の山岳信仰が、シャーマニズム、道教、密教などの影響のも
とに平安時代末頃に一つの宗教形態を形成したものである。この
宗教においては、里の人々が霊地として畏怖した山岳に入って修
行して、超自然的な験力を修めた修験者・山伏が人々の期待に応
えて、霊山詣の先達、堂社の祭、加持祈祷などを行なうことを眼
目としている。

飛鳥時代から吉野が霊山として知られ、仏教者たちが修行におと
ずれていた。修験道の開祖、役小角（役行者）も、ここで修行し
たとされている。やがて平安時代中期になると、藤原道長など貴
族たちの吉野の金峰山参詣が行なわれた。ついで平安時代後期に
は、白河上皇をはじめ歴代の上皇が、相ついで熊野に参詣され
た。こうしたことから鎌倉期に入ると、吉野と熊野は中央におけ
る修験者の拠点となっていた。南北朝期には、吉野の修験は南

朝を支えもした。室町時代に入ると、熊野の修験は熊野三山検校を重大職とした天台宗寺門派の圓城寺末の聖護院に掌握されるようになり、やがて本山派といわれる教派を形成した。

一方、近畿地方の諸大寺に依拠した修験者は大峰山中の小笹に本拠を置き、当山正大先達衆（マツ）と呼ばれる結社を形成した。この先達たちは、役行者以来途絶えていた大峰修行を中興した聖宝を尊師として崇めていた。そしてこのこともあつて戦国時代末には、聖宝が開いた醍醐三宝院を本山にいただいて当山派と呼ばれる教派を形成した。こうした中央の修験霊山の他に、羽黒山・日光山・富士山・白山・立山・石鎚山・彦山など地方でも修験は活発な活動を行なつた。

江戸幕府は全国の修験者を本山派・当山派に掌握させ、両派を競合させた。けれども明治政府は神仏分離政策にのつとつて、修験道を廃止し、本山派は天台宗（のちに同宗寺門派）、当山派は真言宗（のちに真言宗醍醐派）、吉野山と羽黒山は天台宗に所属させた。なお英彦山はこの時神社となつた。⁽¹⁵⁾

日本で霊山と呼ばれている地では、至る所で修験者が山岳信仰と崇め、活動している。日本で代表的な霊山を見ると、出羽三山、大山、富士山、熊野三山などがある。⁽¹⁶⁾

1 出羽三山

古くからの霊山を平安時代に羽黒山の修験行者が開き験所となり、

神仏が習合して三山信仰が形成・普及されたらしい。⁽¹⁶⁾

羽黒山では平安末に羽黒修験が成立し、中世を通じて修験霊場として発展し、山上の寂光寺など七寺を中心に三千五百坊といわれた。近世に入ると庶民を中心に登拝者が増加し、後期に最盛期を迎えた。

出羽三山の近辺には鳥海山や葉山など多くの修験道場がある。近世には山上の蔵王権現堂、中腹の如意輪観音堂など多くの堂舎がたち並び、登拝者や巡礼者で賑わうとともに、郡内の村々に守札や大麻を配布した。⁽¹⁷⁾

岩鼻通明は『出羽三山信仰の圈構造』⁽¹⁸⁾の中で、山岳宗教集落が形成され、中世には莊園からの収入に依存していたが、近世に入ると所領の一部は朱印地として徳川幕府から認められたが、収入の基盤の大部分が失われ信者からの収入に頼らざるを得なくなった。その為修験者たちは檀那場の布教、檀那場の拡大に心血を注ぐことになる。

宗教集落の勢力圏は、門前町では徒歩一日の往復の範囲は二十キロメートルが最低であると指摘している。⁽¹⁹⁾ 門前の山岳宗教集落では市場機能が発達せず、開山期も短く、宿坊経営は夏季の一時期に限られる。当然ながら冬期に檀那場を廻り配札祈祷が欠かせず、山岳宗教集落が成立するには百キロメートルを超えるものがほとんどである。⁽²⁰⁾ 圈内が短ければ局地的な山岳宗教になり、登拝基地としての山岳宗教集落は発達しない、と言っている。

そして著者は「近世再編型」「近世成立型」の内、出羽三山は、「近世再編型」であるという。

2 大山

平安時代には三仏寺などと並び天台化し、多数の子院や僧兵を有する山陰屈指の勢力を誇った。南北朝時代には南朝に与し武威を振るったが、その後寺勢は傾き、山名氏・尼子氏・毛利氏らの祈願所となつて庇護を受けた。江戸時代初期に豪円が復興した。⁽²¹⁾

智明権現を祀る修験道場として栄え、近世には農耕神や水神、牛馬守護神として農民の信仰を集めた。また、大神山神社は奥宮の地に当初は鎮座したが、のちに山麓に社殿を造営して冬宮とし、現在の奥宮を夏宮とした。夏宮は大山智明権現と称され、大山寺とともに修験の道場として発展した。⁽²²⁾

3 石鎚山

四国最高峰の石鎚山は古くから山岳信仰の霊場だったようだが、その初見は『日本霊異記』で、寂仙が「石鎚神」の祀られる石鎚山中で修行、菩薩と崇められたことがみえる。平安時代末頃の石鎚信仰の盛況もうかがわれよう。中世以後も石鎚信仰は鼓吹されるが、一方で別当らは河野氏をはじめ在地の武家とも結んで勢力を維持し、江戸時代には西条藩の外護と前神寺を中心とした庶民らへの布教活動で、四国だけではなく中国・九州にも多くの信者を擁した。⁽²³⁾

4 英彦山

平安時代後期、熊野修験の影響で彦山修験道が成立したが、十二世紀後半、六郷山にも熊野社信仰が入ったわけで、その頃熊野信仰は九州の各地に入った。⁽²⁴⁾ 南北朝時代から室町時代頃かけ彦山流の一派が

形成されたといわれ、中世の彦山は多くの所領と諸寺諸山を配下にしてい九州内に大勢力を有していた。戦国時代末期、大友氏との抗争で全山を焼亡したが、近世初期に復興され、近世を通じ彦山信仰は盛んであった。しかし明治初年の神仏分離で修験の伝統は廃絶され、これは、明治六年十月であったが、⁽²⁵⁾ 時勢の動きにより、明治十五年六月請中惣代、教尊職試補戸板保が再興を願出て、明治十八年三月十二日大分県令西村亮により仏像等を戻して再興された。⁽²⁶⁾ 英彦山神宮が成立した。⁽²⁶⁾

5 立山

立山信仰の繁栄は立山修験の活動に負つ。平安時代からは山中地獄信仰が修験者によりひろめられ、末法思想や浄土教思想とのかわりて極楽浄土信仰（阿弥陀信仰）が形成されていった。近世の立山修験は立山中語（登拝案内）、立山曼陀羅に基づく勸進、宿坊経営など幅広い活動をみせ、立山信仰の展開も諸国にわたった。⁽²⁷⁾

山は女人禁制であるが、芦峯寺においては、女性が姥堂から白布の上を進んで常願寺川の布橋をわたることで、成仏が保証されるという布橋灌頂が行われ、女性の救済も図られた。

立山室堂（富山県中新川郡立山町）は標高二五〇〇メートル近く、熊を追い詰めたという洞窟近くに所在し、登拝の宿泊所や遙拝のための施設として使用された。敷地前後に風除の石積を設けて、南北に二棟がたつ。北棟は享保十一（一七二六）年、南棟は明和八（一七七

一）年の建立。⁽²⁸⁾

6 富士山

富士山登拝信仰が盛んになるのは南北朝時代頃からで、富士山道（表口、駿河）も開かれ、修験道が深くかかわったらしい。登山者のための宿坊が村山に発達し本山系修験の村山三坊が勢力をもった。また現富士宮市村山の浅間神社の別当寺を本山修験の興法寺がとめたが、同寺は中世から登山参詣者の先達をとめたように、富士山信仰も浅間権現を対象に、修験道が深くかかわる習合形態をとった。⁽²⁹⁾

室町頃から富士登拝が行われ、近世には江戸を中心に盛んになり、先達を先頭に、菅笠に白装束、金剛杖をつけて登った。富士信仰が特に盛んな江戸では、富士山を模した富士塚と称する富士霊場が設けられた。また富士山麓の人穴で修行した長谷川角行が開祖といわれる富士講は、江戸市中で信者を集め、富士の八百八講と呼ばれるほどであった。

富士山本宮浅間神社（静岡県富士宮市）は駿河国一宮で、全国千三百余社に及ぶ浅間神社の総本宮である。⁽³⁰⁾

7 熊野三山

熊野三山の別当や大衆は参詣者を接待し、賄い、宿泊、祈祷、山内案内などにあたり、参詣者は彼らを師とあがめ平安時代末には御師と呼ばれていた。鎌倉時代初期の建仁元（一一〇一）年後鳥羽上皇が熊野行幸をした時、田辺では権別当湛願のところを宿所とし、那智では別当行快の儲をつけている。寛喜元（一一三九）年の熊野詣の帰路、経行が田辺で病気になる時、御師の湛真が訪れて祈祷をしている。

御師職が特定氏族と世襲的に結びつき、湛真のように御師が祈祷も行っている。鎌倉時代になると御師は武士を檀那にしていた。鎌倉時代末から戦国時代にかけて御師の間で檀那が財産とみなされて譲渡、売買、担保の対象とされた。熊野三山では、鎌倉時代末には別当職が形骸化し、南北朝期に入ると、別当の庶氏家がそれぞれ独立し、土豪化あるいは御師化していった。

現在全国で三千余の熊野神社が存在する。羽黒神社本社の西殿に熊野権現が客神権現として祀られている。日光山では、承元四（一一二〇）年に熊野修験で大峰山中でも修行した弁覚が二十四世座主となった。白山では加賀馬場は鳥越村熊野宮、美濃馬場は美並村の杉原熊野神社を別宮としている。立山の外宮の岩嶸寺をさすと考えられている。善光寺や戸隠の修験も熊野で修行をしていた痕跡がある。浅間山、白根山にも熊野修験が入り込んでいる。妙高山の関山神社、佐渡の相川や小木の小比叡山などに熊野修験の跡がある。

淡路の諭鶴羽山が熊野権現が垂迹し滞在されたとしている。近江の飯道山では鎌倉時代末に熊野信仰が持ち込まれた。書写山も熊野権現社がある。大山では中世末に民間に信じられた。安芸の厳島に熊野信仰の影響があり、石鎚山、阿波の剣山、九州の彦山など三千余は実態がある。⁽³¹⁾

御師の活動

御師は特定の寺社に属し、その信仰を広め、参詣者を寺社へ案内し、祈祷を行うとともに、宿泊などの便を図った。御師と信者との間

には御師を師とし、信者を檀那とする師檀關係が形成された。熊野御師は先達を従え、先達が信者を熊野まで案内するとともに道中での精進や潔斎ほかの導師を努め、到着後は御師のもとで宿泊し、祈祷などを行った。熊野のほか伊勢や富士、白山などが中世から知られ、近世にはこれらに加え出羽三山や相模大山、江ノ島、武蔵御嶽、善光寺、立山ほか多くの御師が活躍した。⁽³²⁾

五、伊勢信仰

伊勢への参詣は、古代から近世までの過程を『参宮の今昔』⁽³³⁾『お伊勢まいり』⁽³⁴⁾『おかげまいり』と「ええじゃないか」⁽³⁵⁾を参照してまとめた。

伊勢神宮はもと伊勢地方の地方神を祀ったもので、五世紀以降、天皇勢力の伊勢地方進出に伴い天皇家と結びつき、その祖先神と合体されたものと考えられている。古代天皇家が確立した奈良時代に多くの神社の中で最高の地位を与えられるに至った。天皇家の私的な氏神の社とされ、国家の神社とは考えられていなかった。その後奈良時代中期頃から国家神として扱われるようになった。この時期においても、伊勢神宮は天皇家の氏神的性格を強くとどめ、天皇と后、皇太子以外は、朝廷貴族でさえも私的に神宮に幣帛を供えて参拝することは許されなかった。このしきたりが崩れたのは平安末期（十二世紀）になってからのことである。古代天皇家の崩壊とともに伊勢神宮の

経済を支えていた神戸制（朝廷から神社に与えられた封戸）が衰退し、神宮の経済的基盤も国家から離れ、主に東国の豪族層を中心とする武士階級の寄進による、御厨・御園と称する神宮の領地により維持されるようになり、伊勢信仰が地方武士階級のあいだに広がるようになった。教説的には「本地垂迹説」とよばれるものである。仏を「本地」、神を「垂迹」、仏が形を変えて現れたものとする。「本地垂迹説」に基づく仏教的神道説の成立過程において、神道信仰は伊勢神宮を中心として組織されていく。神道教説の体系化は、平安末期から鎌倉初期にかけて進行した。伊勢神宮側が仏教の影響を受けた新興武士階級の支持を得るためにこの説に傾いた。

武士階級は人々に影響を与え、神の信仰を政治的に利用するために伊勢神宮の信仰を重んじた。朝廷が維持できなくなった伊勢神宮を武士階級の手で継承し、最高の国家神に高めようとした。『吾妻鏡』⁽³⁶⁾に出てくる頼朝の妻政子は、承久の乱に勝利して、返礼として所領を寄進した話が、朝廷と結びついていた伊勢神宮が幕府を奪取した。

このような武士階級のイデオロギーとなったのは「伊勢神道」（度会神道）であった。「伊勢神道」は外宮を中心に起こった神道説で、仏教の影響を完全に脱却したものではなかった。平安末期から現れた儒教説を取り入れ神の信仰を封建道徳に結びつけたのが特徴である。「伊勢神道」で強調されている観念は、「正直」「清浄」という道徳観念である。「伊勢神道」が天皇の祖先を祀った内宮ではなくて、外宮（農業神）を中心としていた。

鎌倉時代には、伊勢信仰を高揚させる直接の動機となったのが文永・弘安の「蒙古襲来」があった。この戦時中、勝利の直接の原因となった台風が、伊勢外宮の別宮である風宮の神助による神宮側の宣伝が一般に受け入れられ、武士階級の尊敬が一段と高まった。

中世の伊勢信仰は、主として権力を握っている上層武士階級が中心であって、地方の下層武士階級には強い影響力を持たなかったと見られる。

「御師」は祈禱師からの始まりとも言われ、平安末期伊勢神宮に一般貴族階級が参詣するようになり、はじめて祈願・奉幣を取り次ぐ職としての祈禱師が現れた。彼らは、参詣者に宿舎を提供し、更に地方の地頭・名主などの下層武士階級に伊勢信仰を普及する役割を果たした。南北朝時代をへて室町時代になると、伊勢信仰はさらに下層の小名主層から農民や商人のあいだにも浸透していった。

南北朝合一により政治権力を掌握した室町幕府は、朝廷に代わり神社の祭祀をつかさどった。荘園制の崩壊に伴い、伊勢神宮と天皇家との関係は断絶し、伊勢神宮は天皇家の氏神としての性格を喪失した。事実上幕府によって祭祀されるようになった。地方の中小名主層を中心とする鄉村制の発展にともなって、かれらと同一階層に属する「御師」の活動は活発になり、地域による伊勢講が組織され発達することになる。十六世紀初頭の『犬筑波集』に「結解おやする、伊勢かつの銭」とあり、伊勢講の決算をする講元の存在がうかがえる。

室町末期までに「御師」による伊勢信仰の浸透が明白でないのは、

陸奥・出羽・能登・加賀などの数国で、それ以外は伊勢信仰が普及した。

室町末期になり、内宮の遷宮は寛正三（一四六二）年まで、外宮は永享六（一四三四）年まで中止され、百年あまり中絶された。同時に神宮の内部でも上・中級神官と下級神官とのあいだに対立が起り、平安末期以来権力をもっていた神人層が下級の神役人（御師）層の台頭により勢力を失い、永享元（一四二九）年のたたかひにより、下級の神役人層が神人を破り神官の実権を握った。

政治目的と封建道徳に結びついていた伊勢信仰は、広範な階層の現実的な要求の信仰に変わっていった。現世利益を祈り、武士は軍神として戦勝を祈り、農民は豊作を祈り、商人は繁栄を祈った。

文明（一四六九～一四八六）のころの伊勢には百二十関があり一人一錢ずつ徴収していた。長禄三（一四五九）年の京極智秀や永禄六（一五六三）年の参宮に多数の民衆が加わったのは関税を逃れる為とも言われている。

神宮へ参詣する人々が増加し、迎える外宮の山田、内宮の宇治も前町として発展してきた。参詣の背後には、伊勢講・神明講が存在した。神明講の初見は応永十四（一四〇七）年で中級貴族の山科家が構成され、応永二十四（一四一七）年に中原康富が講を始めた。結成されてから六年目の応永二十九（一四二二）年四月十四日に参宮することを決める。十三日には、季国の屋敷に集まり、当時は慣例になっていた精進に入り、日常の生活と別れを告げ、神まいりにふさわしい清

らかな状態に入る。講衆全員に銭一貫文が渡される。参詣人二十名は、草津で昼食。水口泊まり。十五日は坂下で昼食、窪田泊。十六日は肥留で昼食、夕方山田の御師、三日市場太夫太郎の家に着く。京都から三日の行程であった。その日は連歌の興行、十七日は雨宮へ参拜、内・外宮のほか別宮・撰社・末社などの宮めぐりをしたと思われる。

御師はその檀那の社会的地位に応じている。上級神職の禰宜は大名などの御師となり、階層が低い神職はそれなりの檀那をもつ。「蓮如が伊勢の神主は神を信ぜず、ただ参詣の人から銭をとることばかり考えている」と言っているのも現世利益を説いた連中のことを指している。⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾

近世における霊場霊山信仰で重要な役割を果たしたのが御師や講組織である。伊勢信仰は、古代においては朝廷による国家主義の神であったが、中世以降に武家から庶民へと崇敬を広げていった。伊勢御師は、鎌倉末以降、活発に活動したことが知られ、諸国を巡り、神宮の霊験を説き、神宮大麻を配し、伊勢暦や白粉などの土産を配るとともに、金銭や米などを得て、各地の講中と緊密な師檀関係を成立させた。伊勢講（神明講）においては頼母子などで旅費を準備し、潔斎などのち出發し、伊勢では講ごとに定まった御師の宿坊に泊まり、神宮を参拝し、太々神楽を奉納した。参拝後は直来を楽しみ、帰郷後、講中に大麻や土産を渡した。江戸中期には外宮五〇四家、内宮二四一家と多くの伊勢御師が存在したとい⁽⁴²⁾。

①御師・宿坊の発達

江戸時代に交通・宿坊の発達により各社寺の御師・宿坊の地盤の拡大、講の全国的な普及があり、参詣は盛況を呈した。伊勢御師の激増も注目されるが、文禄三（一五九四）年に山田外宮御師は、百四十五家を数えた。外宮御師の数は次のような推移をたどっている。

寛文十一（一六七二）年三九一軒、正徳元（一七一二）年五〇四軒、享保九（一七二四）年六一五軒、安永五（一七七六）年四七九軒、天保七（一八三六）年三九五軒、明治三（一八七〇）年四八七軒となっている。

享保前後に頂点に達し、その後は漸減の一途を辿る。この傾向は内宮御師にも認められ、中世以来外宮に及ばなかった。正徳年間 二四一家、安永六（一七七七）年二七一家、安政二（一八五五）年二〇〇家、慶応三（一八六七）年一八一家となる。外宮は享保を、内宮は安永を頂点として御師は減少していく。この減少は伊勢信仰・参宮の低下を意味していない。その理由として御師の合併・統合があった。

檀那数の具体例は乏しく、寛永四（一六二七）年福村氏が北伊勢・尾張・三河等で、六百十名以上の檀那に被を配付したのが管見の唯一の例である。『日本永代蔵』⁽⁴³⁾「四仕合の種を蒔銭」では、

其外末々御師、手前右筆のなき人は、諸国檀那まはりのお定りの状、ひとつ銭言文づゝにして、是を書いて年中妻子はこくむ人、何百人が其かぎりしられず。口過ぎまゝに有所ぞかし。

とあり、専属の書記を持たない御師が檀那宛の書付・御札などを一枚

一文で請け負わせ、これにより生計を立てた者が数百名に及ぶとい
う。

さらに元禄七（一六九四）年『西鶴織留¹⁴』の第四、「三諸国の人を
見しるは伊勢」に、

此所は太神宮のお影にて、年中さまくの身過有。諸国へ初尾く
ばりの状、大杉原一束を銀言刃八分の書賃、中すぎはらのざつと
したる状は、一束言刃三分にて、隙成医者・浪人の是を書ぬ。

とあるように、御師の札などを大杉原一束を銀言刃の書賃で暇な医
者・浪人がこれを書いている。

信州を地盤とする内宮御師宇治氏の檀那は天正九（一五八一）年に
三百四名、天明頃には、一万九百軒を数えた。

御師久志本氏の手代が享和元（一八〇一）年信州更科郡を廻国した
時の檀那は二千名前後、天保十四（一八四三）年の一御師は甲斐巨摩
郡の一郡だけで四千名以上の檀那を有していた。このことは、神宮文
庫蔵の『古森大夫引受諸国御檀家御被賦帳¹⁵』にある。

江戸の中末期と思われる神宮文庫蔵の『越後国信濃国巨家数帳¹⁶』に
よっても、御師某の越後・信濃両国にわたる檀家は、五千七百八十戸
に及び、御師千萱氏は安永六年、備後だけで一万一千百三十家の檀那
を有した。

神宮文庫蔵の山田『師職檀家家数帳¹⁷』の安永六年によると山田四百
七十九家の有する全国檀家総数は、四百三十八万九千五百四十九戸を
数える。国別・都市別檀家数の主なものを左記に記す。

陸奥	二九七二二二	出羽	二二七七四七	上野	一六七三〇四
肥前	一〇七一五五	常陸	一三二四八〇	肥後	九九七三六
下総	八五五一八	筑後	二四二〇〇	豊後	七九六九一
安房	二二二三九	甲斐	七五六六三	伊賀	一四五四四
伊勢	七五六六三	佐渡	一一一三〇	筑前	七二二三八
京	七一四四	下野	六五一〇〇	大阪	三三八七
江戸	四六九六七	志摩	三二一〇		

檀家は個人を対象にするのではなく、家単位であるから実際は、こ
の四〜五倍に達するとみるべきである。

伊勢神宮・高野山のほか各社寺にも御師・宿坊が設けられ、それぞ
れ広範な檀那場を保有していた。

御師・宿坊の収益は、この被配りによるほか、参詣者の宿料である
が、この宿泊収入は、門前町と営業的旅館がしだいに発達するに伴い
競合関係となり、やがて侵害されがちとなった。このため参詣人の奪
い合いを繞って、両者の間にトラブルの起こることも稀ではない。明
和以来文化のころまで湯殿山では宿坊教護寺と鶴岡の一般宿屋との間
に紛争が続いたのはその一例である。¹⁸

日本の修験者は、富士山・立山・出羽三山・大山・石鎚山・英彦
山・熊野三山など大きな変化が見られない。信仰を集め、師檀関係を
つくり発展した御師の姿がある。ここでは、富士信仰と立山を扱っ
とにする。

六、富士信仰

富士山は高く、多くの人が山頂に登りたいと願望し続けたと考えられる。最初に登頂した人は不明だが、修験者は落命しても山頂に何かがある、と抱き続けた。文献によると『富士山記』に山頂の様子が書かれ、都良香が登頂した人から伝聞としてまとめた。

『本朝世紀』の久安五（一一四九）年四月十六日の条には、末代上人の名前があり「駿河国に一上人あり。富士上人と号し、其の名末代という。富士山登攀すでに数百度に及ぶ。山頂に仏閣を構え、これを大日寺と号す」登山道具が不整備で食料や暖をとるための火の道具などの準備を考え合わせると、数百度の登山は、誇張されている。それでも昭和五年に富士山頂から多くの経筒と経巻が出土し、経筒には承久（一一一九～一二二）の紀年銘と、経文には末代聖人の文字があった。末代上人の弟子が埋経したと思われる。

富士山の登山道は、『甲斐国志』巻三十五では四道を紹介している。

登山路八北八吉田口、南八須走口・村山口・大宮口ノ四道ナリ

右の登山路以外に駿河側に須山からの道があった。しかし、宝永四（一七〇七）年富士山の噴火により中絶された。⁽⁵¹⁾⁽⁵²⁾⁽⁵³⁾

十五世紀後半の時点で多くの道者が吉田から登拝していた。中世になると修行者以外にも信仰のために登山をする人が増えた。『勝山記』明応九（一五〇〇）年のころに「富士へ道者参ること限りなし

」と富士登山の盛況ぶりが記されている。⁽⁵⁵⁾

江戸時代を迎えて、江戸をはじめ、関東諸国からの登拝者が増加した。

1 富士講

角行は天文十（一五四二）年肥前長崎で生まれた。永禄三（一五六〇）年、三年の修行を終えた角行は、同年二月、常陸国新治郡栄村のお猿山に登つて、鹿島洋にのぼる旭日を拝して祈り、自立を宣言する。奥州は陸中国磐井郡達谷村に至り、脱骨の窟に入り三日断食行、つづいて二十一日間の修行、この行中に神人があらわれ、富士へゆくと告げられる。

五月十九日、富士西麓の人穴に入り、一千日の立行をはじめた。元亀三（一五七二）年、角行三十才、四月八日人穴を出て、六月三日に吉田口より富士に登る。正保三（一六四六）年六月三日、角行は人穴洞中に死す。行年百六才。角行以後、四世月旺の二人に弟子があり、寛文十二（一六七二）年に入門している。村上七左衛門三十四才。月心と行名を与えられる。森太郎吉三十才。月行と命名される。富士講の講祖と仰がれた食行身禄が入門した。⁽⁵⁶⁾

身禄が六十才、享保十八（一七三三）年六月十七日を命日として富士山頂で入定することを決意し、同年六月十五日には登頂し、山頂の釈迦ノ割石で準備に入ったが、大宮役人に追い立てられて、吉田七合五勺の烏帽子岩で入定した。⁽⁵⁷⁾

2 講の発生

身祿の死後三年の元文元（一七三六）年、弟子の高田藤四郎は「身祿同行」と称する結社を興し、寛保二（一七四二）年には、弟子吉田平左衛門の「お水」に対して、奉行所から禁止の町触れが出されている。これは富士山頂の金明水を管理する「お水講」を立て、金明水を「富士の加持水」と称して信徒に与えた。平左衛門も自分中心の布教活動をしていたのである。

元祖藤原角行にはじまり中興の祖食行身祿を経て、その弟子達が富士講へと誘った。

身祿の弟子では、高田藤四郎は丸藤講⁵⁸、小泉文六郎は一山講、永田長四郎は永田講、身祿の娘まんの家に入りに入っていた遠江屋半七は九半講、近江屋嘉右衛門は丸嘉講の祖となった。百八の講がある中、右記以外に代表的な講を示すと村上講・山三講・山吉講・丸宝講・山万講・丸灌講などが存在した。

享保十八年に食行身祿が富士山で入定してから庶民が自由に登拝するようになった。それで代参講を誕生させ、関東の農村を中心に富士講の結成がみられ、江戸市中でも爆発的な講の結社が見られた。富士山を模した小型の富士塚が多数築かれた。この富士塚は富士登拝のできない老若男女が、富士登山と同じ御利益を求められるとされていた。『精選 日本民俗辞典』⁵⁹はこのように伝えている。

江戸時代初期の仮名草子で『竹齋』⁶⁰の作者富山道治（とみやまどうや）は、伊勢国松坂の出身で京都の曲直瀬玄朔について医学を修めた。本作品は元和七（一六二一）年の成立と推定されている。この記

事の中に

雪よりも上をば知らず富士の山見えたる程は高き山哉

当時の人々の印象から富士山はそびえ立つ人跡未踏の山のようにもあるし、特に雲上の頂は神秘的に見える。

冬期の富士登山が大変で、明治期に『富士案内』⁶¹を書いた野中勝は簡素な装備で冬山に挑戦したが、この本の解説を書いた大森久雄が語る富士山の印象は、「夏の富士山には十数万の人が登るが、雪のついたこの山は様相をまったく変える。雪・氷・強風・雪崩で包まれ、ヒマラヤ級の困難さで武装される。（中略）ガラスのようになつた硬い雪や氷の、さえぎるものがない広大で急な斜面は、壮麗無比であると同時に地獄の恐ろしさをも与えてくれる。巨大な氷の滑り台と化した斜面は、いまでも毎年冬、滑落や強風によつて登山者の死亡事故を生む。」⁶²

元文元年、身祿死後三年目に弟子高田藤四郎（日行青山）は身祿同行の講を興す。この講は身祿三十三回忌に富士塚の築造を発願し、安永八（一七七九）年に高田富士を完成する。江戸の身祿富士塚の第一号となる。藤四郎死後、講は丸藤講と改まった。

吉田平左衛門は富士の加持水と称して信徒に与え、「山吉お水講」は枝講二十四になる巨大な講に成長する。田辺十郎右衛門は御師の株を入手して田辺近江となり、身祿介添の事は世間に知られ、『三十一日の巻』⁶³の写巻授与など、布教活動をはじめ、子供の中雁丸豊宗も協力して甲相地方に多くの講を作った。⁶⁴

他に大和国添上郡石打村、岡山県川上郡吹屋町、伊勢答志島の富士講がある。

富士塚は富士講と深い関わりがある。安永八年江戸高田の富士行者藤四郎の発願で、高田水稲荷の境内に富士塚を築いた。これが発端となつて各地に築造された。

富士信仰の形式として、富士形の山、富士形の石塊などが礼拝の対象になつた。江戸以外にも神奈川・埼玉・千葉の各地に築造されていった。⁽⁶⁵⁾

3 御師の町形成

上吉田は元龜三（一五七二）年に旧地の古吉田から現在地に移転してきた。その当時の集落は、現在の上宿と中宿の範囲にある。現在の下宿は、慶長十一（一六〇六）年に新たに付加された地区である。町割りは、中央に通りがあり、東西に町屋があり、背後に二筋の雪代堀で仕切られている。屋敷は、表通りから雪代堀迄の奥行きある短冊形の地割りになっている。御師の屋敷は、表通りから奥に引つ込んだ場所に構えられ、その細く長い道を「タツ道」と呼ばれ、御師屋敷の構えの特徴でもある。⁽⁶⁶⁾

4 山内の支配

吉田口登山道は吉田御師の支配のもと、管理されていた。御師による山内支配は、道者（信仰者）の保護と安全保障が目的であり、同時に御師並びに地元へ金銭をとまなう利益につながるものであった。上吉田の入口に設置された道者改役所では道者の国もとや人数が把握さ

れ、山役銭を徴収し切手（入山許可書）が交付される。富士山中腹を一周回る「中道廻り」を希望する道者には遭難の危険が伴うから、御師の特別許可が必要とされた。山内の人身事故やもめ事の処理、山小屋の設置など⁽⁶⁷⁾をした。

5 檀家廻り

御師は富士山の神霊を祀り、信徒に代わつて神霊に祈願する。各地の村を廻り、富士信仰を布教する中で得た信徒は檀家と呼ばれ、御師との間に師檀関係を作り、一定区域の檀家を檀那場といい、毎年決まつて檀那場を廻ることは、御師の重要な仕事であつた。檀家には「富士山牛玉」や「富士山神璽」などの護符や神札を配布し、求めに応じて家内安全・富士の神霊に祈願し、病氣平癒などの祈禱が行われ、檀家からは、初穂（金品）を受け取つた。檀家の数は御師により異なるが数千軒を束ねる者もいた。勿論、檀家が売買の対象になつてゐるのは有名な話である。

檀家廻りは御師の大切な仕事である。享和二年九月に富士講禁止の町触れが出た。この時、御師一同が寺社奉行への嘆願をした。嘆願書の内容は御師の仕事がよくわかるので左記に紹介しておく。

一、富士登山の節、山例によつて浄衣等冥加料受納致し差出し来り候

一、当山信仰によつて八葉（頂上）御直来御供へ並に太々御神楽日掛月掛の儀は寄限によつて執行仕り御被守差出し申候

一、諸国の配札の節臨時願によつて 安産御守は不及申其外山例

の御富世貴差出し来り候是は外社にて用い候御符の儀に御座候

一、信心によつて登山願候者へ当山の文伝へ来り候

一、檀家へ御札守差出し来り候⁽⁶⁵⁾

御師の仕事の主なものは、檀家廻りと登山道者の坊入りの受容である。

御師の檀家廻りは、各地にひろがる檀家を巡回して神札を配り、上吉田を出て何十日も村の旧家、講先達の家を宿として旅を続けた。訪問する季節は春先と秋の収穫後で、同じ場所を二度廻るのを「両度廻り」という。年に一回しか行かない檀家もある。それは富裕に係る。軽く嵩張らない品を手土産にして持つて訪れた。御師小沢鯉一郎は、戦前には扇子・元結・半紙・富士山絵図・壁谷の目薬・煙草入れ・箸などを持参した。壁谷という農家で作られた家伝薬、蛤貝のなかに赤い練り薬を入れ、水をたらして目に塗る薬で富士講仲間に評判が良かった。煙草入れは印伝で、宿を願う家に煙草入れ、箸二組を渡した。その他は扇子が箸二組を置いた。檀家廻りを受ける講も二の膳付きで歓待したと伝えられている。

御師が檀家を大切にしたのは、財産の側面もあり、御師同士で売買が煩雑に行われた。

右の考えを支持するのにも最もよい史料がある。

慶応元年の証文だが全文を紹介する。

売渡申旦家証文之事

一金拾両也 但通用金に而

右者去ル万延二酉年十月 持山主税殿より買置候旦家 甲州西郡

西野村始四ヶ村家敷四百五拾軒之場所 我等勝手合を以親類其外

相談之上 古証文帳面相添売渡申候処聊相違無御座候 此旦家之

儀者拾五ヶ年季二買置候儀二御座候間 右年季来り候はば為請可

被下候 其期月調金成兼候はば此証文にて永久所持可被成候 且

此旦家に付脇借者勿論故障申者一切無御座候 万一有之候はば当

人加判何方迄も罷出急度埒明 貴殿江御苦難相懸申間敷候 為後

日売渡申証文 仍而如件

慶応元乙丑年

当人 小沢河内後家ひこ印

親類 大雁丸外記印

同 榎田但馬印

組合 仙右衛門印

同 長兵衛印

加判 持山主税印⁽⁶⁶⁾

6 宿坊の経営

吉田口の御師町は登山基地であった。御師宅が宿坊として機能しており、道者は御師宿坊に登山前夜と下山当日の二晩宿泊するのが通例であった。檀家の参詣はおおむね旧暦六月七月の二か月間で、道者が同じ日に集中しないように調整した。ひと夏の宿坊収入の総額に大きな差を生じさせないための方法である。宿泊代は「坊入れ」といい、御礼の意味もあり、金額は一定ではなく、檀家によって違っている。

道者は大広間で寝食の世話を受け、翌朝屋敷前の滝で禊ぎをし、御師

の払いを受けて登山道に向かった。⁽⁷⁰⁾

7 大山講について

富士信仰と直接関係があるわけではないが、富士信仰とセットになっている大山講の江戸の廻檀を（『江戸庶民の信仰と行楽』⁽⁷¹⁾を元に概観する。

大山の御師は室町時代が始まりで、江戸時代に定着した。檀家制度が確立するのは、元禄十三（一七〇〇）年前後で、大山講が組織された時期は、寛文五（一六六五）年八月に御師佐藤蔵人が武蔵国橘樹郡鶴見村・小机村など十二か村に存在する四百七十軒の檀那を御師内海次郎右衛門に金二十二両で売却している。

大山御師の活動に配札がある。檀家廻りの季節は、十二月上・下旬、正月・二月・三月の農閑期である。各坊では、所属の檀家圏を地域別に分け、各地域を一週間から二十日間ぐらいで一巡できるように計画し、定期的に檀家廻りをしている。年に一度というのが一般的だが年に二度から四度檀家廻りをする。

村山家文書の安政六（一八五九）年四月以降の万仕入帳から御師の服装や仕入れ商品がわかる。檀家帳並びに収納帳、祝詞本、御札、社務所への届旅行証、土産物、認め印、配り札、雨具、両掛、提灯。衣類は羽織、袴、上着、下着類、股引、脚絆、帯類、わらじ掛、下駄・足袋など。手道具は鼻紙、手拭、煙草入、財布、矢立、時計、帷子、糸り巻、扇、半ケチ。

この時の檀家廻りの予定は約二百軒で、江戸仕入控に記した品は、奉

書札四枚、奉書代三十二枚、守り十枚、山椒一斗、山椒袋二百枚、箸四百膳、箸袋二百枚、茶ほうじ百三十本、団扇四十本、御供二百包。一方、葛西（南葛飾郡方面）の仕入控は、大札、小札、菓、杓子、はし、絵、吸物椀、手掛、盃、カマス煙草入れ、団扇などで、檀家や地域により配布物が異なっている。

8 御師の収入

檀家廻りの際に返礼として初穂を渡す。御師を迎えた村では神聖視し、鄭重にもてなし、初穂料として米・農作物・お賽銭などを寄進した。初穂は村の代表者の家に集められ、まとめて御師に渡され、一定量がたまると換金され、一部は大山寺へ納められ、残りは御師の収入となった。信者が大山に参拝登山をし、山頂でご来迎の後、初穂を納めて（米麦、銭）配札を受け、御師宅に宿泊し、食事でもてなし大山近隣を案内した。

大山町村山坊の天保二（一八三一）年六月の『御祭礼中諸収納帳』⁽⁷²⁾は、同年の夏山中（六月二十七～七月十七までの二十一日間）一人で参拝が三十三回、一人から四人が全体の七十五パーセントを占め、坊入りが宿泊代で一人平均一泊三百文、茶代は坊入りの十パーセント～三十パーセントを払っている。

七、立山信仰

「江戸時代の立山参詣」福江充に従えば、天正十八（一五九〇）

年、立山山麓の宗教村芦峯寺では、加賀藩主前田利家の命で、嬬堂をはじめ宗教施設の大がかりな修理が行われた。慶長十九（一六一四）年初代藩主夫人芳春院と二代藩主夫人玉泉院が参詣に訪れた。逗留中嬬堂の前の橋に布橋を掛け宗教儀式を行っている。

①第一期 寛永期より元禄期まで

寛永元（一六二四）年に三代藩主より立山足倉中宮寺に出された禁制には、「於諸堂、参詣人作法事」「号禅定、猥々間敷喧嘩口論事」「於宿坊長逗留事 付、諸参詣人狼藉事」この条項から芦峯寺諸堂の参詣者、立山山中での禅定登山者の存在と芦峯の庄立山中宮嬬堂は内外ともに「日本三禅定之一山」と認識されていた。加賀曹洞宗大乘寺の元山道白が訪れている。

②第二期 宝永期より寛延期まで

正徳以前から六十六部廻国行者が立山に訪れ、六十六部廻国行者のうち備中国の與兵衛が元文四（一七三九）年七月に立山に訪れている。他に遊行聖も修行の場として、宝永六（一七〇九）年に近江の栢應が立山で七日間の参籠を行い、享保四（一七一九）年から六（一七二一）年まで浄土宗捨世派の木食聖待定が断食念仏の修行をしている。

③第三期 宝暦期から寛政期まで

宝暦（一七五一～一七六四）年間以降、庶民の参詣者が訪れた記録がほとんど残っていない。ところが紀行文には、立山を訪れた人がいる。画家の池大雅は寛延三（一七五〇）年、宝暦十（一七六〇）年の

二度禅定登山を行っている。天明（一七八一～一七八九）年間に富山藩に仕えた歌人佐藤月窓が、従者一人と禅定登山を行っている。この頃立山には、廻国の修験者や優婆塞や老若を問わず多くの庶民が参詣していた。立山参詣は信仰と観光・遊楽が表裏一体化していた。

④十九世紀以降における参詣者の実態

海保青陵は文化三（一八〇六）年七月に立山に登拝した。文化十三（一八一六）年には日向国佐土原の安宮寺住職泉光院野田成亮が六月五日から七日にかけて禅定登山を行ったと、『日本九峰修行日記』に書かれている。

1 三山（白山・立山・富士山）禅定者

芦峯寺日光坊蔵の慶長九（一六〇四）年の文書では、三河・美濃・尾張の村々に檀那場が開かれていたと推測している。立山信仰も江戸時代初期から中部・東海地域で布教されていた。この背景があつて、三山禅定の一か所として多くの参詣者が訪れた。文政六（一八二三）年、三河大府村から十三名が五十一日間かけて白山・立山・富士山を巡っている。同じく文政六年に尾張藩士の某が三山を巡っているが、下山の際には、立山下温泉を経由していて、既に信仰と観光・遊楽要素が混入している。

「宝永元年上達書」（『越中志徴』⁷⁵）によれば、「立山下温泉、四月朔日より八月中迄入湯之れ有り」とあり、また「宝暦十四年調書」（『越中志徴』）には、「温泉立山続谷の内、湯谷川縁小薬師と云う山谷の内に出、立山の湯と唱へ候、芦峯寺村より湯本まで道程八里程」とあり

立山下温泉、立山の湯と呼ばれていた。

立山温泉の管理と運営

（『越中志徴』）に「佐々成政入湯場」として立山下温泉の頂があり、「土屋義休の山川記に、天正十二（一五八四）年十一月二十四日越中の国佐々成政雪中に信州越の刻、立山の温泉へ入湯して、」これが文献に見える最初の記述である。

立山温泉と文人

江戸時代中期以降、立山信仰に基づく伝統的な禅定登山が主流であった。登山者の意識が微妙に変わり、観光・娯楽的な要素が高まり、立山温泉は加賀藩が温泉への新道を開き、簡単に温泉場まで行けるようになった。温泉の効能を聞きつけ、男女貴賤を問わず多くの人が訪れた。⁷⁶⁾

2 江戸時代前期における富士山・立山・白山の三山禅定

本州に三山禅定と言われる壮大な巡礼道があった。富士山・立山・白山を巡拝するものであるが、江戸時代初期には、存在したといわれている。高瀬重雄「富士山・立山・白山の三山禅定」によると、『莊嚴講執事帳⁷⁷⁾』の延宝八（一六八〇）年七月の条に記載された内容から江戸時代初期と推測している、と福江は紹介している。江戸時代初期の三山禅定に關係する史料は、これしかなかった。ところが、愛知県常滑市の鈴湫資料館に延宝四（一六七六）年『三禅定之通⁷⁸⁾』が発見され、「三禅定道」と題し、知多郡常滑の小鈴谷から出発して、元に戻るコースである。主な経由地を示す。

小鈴谷（尾張国）→高師（三河国）→白須賀→新居→浜松→見付
→袋井→掛川→金谷（以上、遠江国）→島田→藤枝→岡部→府中
→江尻→由比→蒲原→岩本→大宮→村山→富士山（以上、駿河国）→吉田→川口→藤野木→甲府→葦崎→台ヶ原（以上、甲斐国）→葛木→金沢→上諏訪→下諏訪→塩尻→松本→刈谷原→青柳
→稻荷山→善光寺→牟礼（以上、信濃国）→関川→関山→高田→
今町→能生→青梅→市振（以上、越後国）→泊→入善→三日市→
魚津→上市→岩崎寺→芦崎寺→富山→高岡→石動（以上、越中国）→竹橋→金沢→鶴来→尾添→白山（以上、加賀国）→石徹白
（越前国）→長滝→白鳥→八幡→関（以上、美濃国）→犬山→小
牧→名古屋→小鈴谷（以上、尾張国）

他にも、寛政四（一七九六）年池田町屋村の古絵図を分析して、富士山・立山・白山を祀った祠が造られたことを発見した。これを登拝することによって三山禅定を成し遂げたことになる。

地元の山麓の芦崎寺衆徒達の三山禅定の意識は、同寺衆徒・神主が延宝二（一六七四）年八月十五日付で加賀藩寺社奉行永原左京・笹原織部に宛てた書き上げを見ると、「（前略）右如申上ル芦崎之庄立山中宮熾堂と申は日本三禅定之一山二而御座候故、（後略）」同じく延宝三（一六七五）年四月付で加賀藩郡奉行石黒源右衛門・山村市十郎に宛てた書き上げにも、「（前略）右申上ル趣、蘆崎之庄立山中宮熾堂と申八、日本三三禅定之一山二御座候故、（攻略）」の文言になっている。

岩峯寺衆徒も延宝五（一六七七）年四月二十八日付けで加賀藩に宛てた岩峯寺高物成に係する書類の芦峯寺側の写しに「一立山大権現は伊弉諾命・刀尾天神。御本地は阿弥陀如来・不動明王。新拜主給諸堂数四拾七社。谷二八一百三拾六地獄現目前、日本三禅定之峰二而御座候。」とある。延宝期には三山禅定が認識されていた。また、これらの書類は、芦峯寺・岩峯寺の衆徒が三山禅定を誇りとして加賀藩に上申している。

三山禅定のコースは、江戸前期から後期にかけて巡拝コースが拡大されていく。

3 芦峯寺宿坊家衆徒が日本国内各地で形成した檀那場の分布状況

芦峯寺一山会所蔵の古記録と他の史料から宿坊家の配札地域を掲げている。

吉祥坊は江戸・武蔵国・美濃国

教算坊は（大坂・越前国）

教蔵坊は越後国・（信濃国）

権教坊は飛騨国・尾張国・三河国・（遠江国・駿河国）・相模国

実相坊は江戸

泉蔵坊は尾張国

善道坊は飛騨国・尾張国・三河国

相栄坊は江戸・武蔵国

相善坊は越中国・（能登国）

大仙坊は（愛知県（尾張国））岐阜県

等覚坊は（能登国）・美濃国

日光坊は美濃国・尾張国・伊勢国・三河国

福泉坊は（美濃国・尾張国・信濃国）・江戸・武蔵国・（上総国・安房国）

宝泉坊は（江戸・相模国）・武蔵国・上野国・上総国

宝伝坊は（信濃国）

宝龍坊は尾張国

宮之坊は尾張国

宿坊家不明で新潟県・長野県・群馬県・埼玉県

宿坊家不明で上総国・（下総国・常陸国）

（ ）は主要檀那場

芦峯寺宿坊家の檀那場は北陸・中部・東海・関東・甲信越など本州を中心に多く分布し、尾張国や江戸には多くの宿坊家により檀那場が形成されている。西は大坂、東は房総半島や常陸国がある。本州の中央に環ができる。これは三山禅定のコースと合わせると重複する部分が多い。また、芦峯寺宿坊家の檀那場の分布状況を比較すると右の傾向が強まると言つ。

4 芦峯寺宿坊家数の増加にともなう廻檀配札活動の拡大の可能性

芦峯寺文書から芦峯寺一山宿坊家の軒数の変遷は次の通り。

延宝二年八衆徒、十二神主、二十軒

延宝五年八衆徒、二十社人、二十八軒

延宝八年七衆徒、十三社人、二十軒

正徳二（一七一二）年十二衆徒、十五社人、二十七軒

享保期（一七一六～一七三六）不明、三十二軒

元文二（一七三七）年不明、三十六軒

宝暦十二（一七六二）年二十三衆徒、十五社人、三十八軒

明和五（一七六八）年二十三衆徒、十四社人、三十七軒

安永九（一七八〇）年二十四衆徒、十三社人、三十七軒

享和元（一八〇一）年三十三衆徒、五社人、三十八軒

となつている。右の史料から芦峯寺の宿坊は増減を繰り返しながら廻檀配札活動を行う宿坊家も増加し彼らが形成する檀那場も日本各地へ拡がっていった。

ここで江戸時代中期の檀那帳から関東や東海地方に芦峯寺宿坊の檀那場が開拓・形成されていた。江戸時代後期の檀那帳には、護符類、針・傷薬・楊枝・箸・元結・経帷子などの諸品の頒布、血盆経納経の予約の記載がある。ここには、商業活動的性格が強く感じられない。

江戸および周辺国の檀那帳の分析から、師檀関係の形成について、商人・職人・新吉原関係者などが対象で、その後武士層へ進んだ。

芦峯寺衆徒の檀那場形成過程は三山禅定と密接に関係している。盛田家文書の白山御師と富士御師との争論の文書より、白山信仰・富士信仰が確立していくなかに立山信仰が加わり、三山禅定コースの確立により、芦峯寺衆徒の檀那場は形成されていった。特に東海地方では、当地の人々の富士山や白山とともに立山を志向する気持ちと芦峯寺衆徒の当地に檀那場を開拓・形成したいという気持ちが重なって濃

密な檀那場が形成された。⁷⁹

5 芦峯寺教算坊が大阪で形成した檀那場と立山曼荼羅

表紙に「御祈祷之控 寛政十二歳庚申 二月吉祥日」とあり、裏表紙には「立山芦峯寺教算坊」と記されている。内容は、檀家軒数二百二十軒、信徒数延べ二百三十人、宿軒数は三軒とある。この内大阪三郷の家数百七十四軒、信徒数百八十人だが、大阪は七割前後が借屋と思つて良い。北久宝寺町・北久太郎町・本町・順慶町・安堂寺町とあるが表に住居あるいは店があるとは限らない。それに、新町在住者、新町界限に住む者が九十七人、それに西高津町・高津五右衛門町・幸町・道頓堀など大店の商売人が住む土地柄でもなく、この名簿を概観して感じたのは、社会的に追い詰められている人が信徒になつている。因みに新町界限・新町在住者が大阪の信徒の半数を占めていることから也容易に判断ができる。

頒布品について 名簿の中から拾っていくと、者や又四郎・加めや長右衛門には病氣護符、八百屋安兵衛・かざりや藤助には家内安全の護符、八百屋安兵衛・かざりや藤助の信徒には札を頒布している。博労町のしまや忠兵衛は教算坊の大坂の檀那場で世話人・宿家を努め、現地で立山講を支える代表者なので大札が頒布されている。他には、山田屋五兵衛・八幡屋六兵衛・飛免じや弥兵衛・加ら可さや等の信徒には、経帷子が頒布されている。

檀那帳が使用された時期について この帳面は、寛政十二（一八〇〇）年から継続か断続かは不明だが、文政五（一八二二）年から天保

九（一八三八）年を経て安政二年までは使用されていた。この檀那帳は改訂がなく、作り替えられた事もなく使用され続けられた。そのことから大阪の檀那場には、成長や展開がなかった。この点、江戸の檀那場の事例と大きく異なる。大阪の信徒の特徴は、新町遊郭の関係者、歌舞伎役者、宗教者などの檀家である。

6 芦峯寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と「立山信仰」の展開⁹⁰⁾

江戸時代、立山山麓の芦峯寺衆徒は、毎年農閑期に各自の檀那場に赴き、三〜四か月の滞在期間中に檀家を巡回し、仏前廻向などのさまざまな祈禱を行って立山信仰を布教しながら、護符や経帷子を頒布した。このような宗教活動は「諸国檀那配札廻り」や「廻檀配札活動」などと称され、冬期には豪雪地帯となる芦峯寺の衆徒たちにとって、実質的に出稼ぎであった。

史料Aは、使用宿坊家・成立年末記載の檀那帳

江戸の檀那場における信徒の地域別分布状況と人数規模

江戸御府内に百六十四名の信徒と宿数は十軒、武蔵国に九十名の信徒、宿数は五軒である。

史料Bは、享保期の成立と判断した檀那帳

江戸御府内に三百名の信徒、宿数は十一軒、武蔵国に七十八名の信徒、宿数は六軒、上野国群馬郡に二名の信徒、上総国に五名の信徒、安房国に十七名の信徒、宿数は一軒である。

史料Cは、同坊衆徒教清の成立年末記載の檀那帳

江戸御府内に四百三十一名の信徒、武蔵国が四十八名、該当地域不

明者は二十一名となっている。

史料Dは、同坊衆徒照円の文化十一（一八一四）年の布橋大灌頂法会勸進記

檀家への寄付の要請に関する史料から、宝泉坊は、芦峯寺一山の寺院として、輪番制で廻ってくる娼尊別当職（任期一年）を勤める。同職に就くと布橋灌頂法会会の導師を勤めなければならず。儀式に必要な三百六十六反の白布の費用や、娼堂の年中行事に必要な御供や灯明の費用をまかなわなければならず、宝泉坊の自力では及ばないので檀那場の信徒に助成を求めている。諸経費の総額が白布の四十六両三分を含めて、百二十一両一分としている。実際の寄進高は、二十三両二分二朱、銭二貫百文、六千疋、青銅八百七十疋、青銅五百銅、白布九十七反、白銀十三枚、鳥目二百、南兩⁹¹⁾十五片を集めている。

史料Eは、使用宿坊家不明で文政九年の新吉原初穂集帳

文政九年の史料から新吉原に立山信仰の講組織が存在し、四十名が記され、文政九年から安政元（一八五四）年までの新吉原講中からの初穂寄進高は、弘化（一八四四〜一八四八）までは金二分二朱と銭百文、嘉永頃より金二百疋となっている。

史料Fは、同坊衆徒照円の天保十（一八三九）年の檀那帳

この檀那帳の内容は、信濃国・上野国・武蔵国・江戸・相模国に檀那場が形成されていた。信濃国の信徒数四十七名、宿数十二軒、上野国の信徒数百九名、宿数二十二軒、名主一名、武蔵国の信徒数百五十九名、宿数十八軒、名主一名、相模国の信徒数百八名、宿数十軒と

なっている。

江戸御府内は信徒数二百十八名、宿数一軒、該当地域の不明は十件、十名、宿数二軒である。

この廻壇配札活動は、芦峠寺から江戸までの行程の地域はおおむね飛騨街道→野麦街道→武石道→北国街道→中山道を経由して江戸の檀那場へ行く。

「右之外、宿中小午王札弘、組人足式人二而配札」

「右之外、村中小午王札弘之。組人足式人、名主様より被下候様、御頼申候而、五良兵衛江行、配札仕可申事」

「右之外、村中小午王札弘之。組自分二而配札」

「右之外、村中小午王札弘之。人足言人を以配札」などの注記。

史料Gは、泰音の嘉永六（一八五三）年の檀那帳（芦峠寺一山会所蔵）

江戸御府内は信徒数三百六十七名、宿数三軒である。

浅草の信徒の半数以上は新吉原の関係者で、江戸の檀那場の基盤の一つと考えられる。

享保期から嘉永期にかけて江戸御府内地域のうち浅草・日本橋・京橋に信徒が多い。浅草の中核となった新吉原関係の信徒達は、娯尊信仰を基盤にもち、血盆経信仰や布橋大灌頂など女人救済信仰としての立山信仰と、女性の苦界である新吉原とがうまく根付いた。⁽⁸⁾

八、近世寺社参詣と御師の役割

近世寺社参詣における御師の役割を「宗教の社会的機能」「江戸における檀廻」「御師側の檀家認識」「御師の檀家保有形態」「檀家側の御師認識」「都市型参詣における御師の役割」と六つの節に分けて説明して、説得力があり、援用することにする。

宗教の社会的機能「御師とは、熊野・伊勢に代表されるように、特定の寺社に属し、祈祷・宿泊・参詣の便宜をはかる者である。時代・寺社によつて多少機能が異なるが、おおむね寺社へ参詣者を誘発し、檀那を維持する役目を果たしていた。近世には檀那が増加したものの信仰的絆は減退し、かつ参詣者の直接母胎は「講」であつたとされる。新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』⁽⁸²⁾によると、御師には莊園を有する社寺の下級神官から出た者と、山岳宗教の修験が近世になり、野に下り御師職に転じた者がある。御師の存在を社会的機能以外から規定するのは困難である。御師は、信仰拡大の責務、廻壇を行い、寺社を経済的に支えた宗教者としては、高野聖や熊野行者などが存在し、「聖」「比丘尼」「本願」「願人」など名称も実に多種多様で、時代と共に概念も変わり、本章で登場する「多賀御師」も実際には「坊人」と呼ばれる下層の勧進僧である。ここでは御師を広義に捉えていることを断つておく。浅香幸雄「大山信仰登山集落形成の基盤」⁽⁸³⁾（『東京教育大学地理学研究报告』）は相模大山について大山御師が、通常年一回の檀廻が年二回から四回行われている。相模原台地南部の川向八ヶ村に注目し、恵まれない自然的条件と米作の不安定さから大

山への帰依を深め、御師とのつながりをもったことを明らかにした。また、田中宣一は「相州大山講の御師と檀家―江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐる―」（『日本常民文化紀要』⁸⁴）の中で大山御師の一つである村山坊の下総国の檀廻について分析し、初穂が組織化された手法で集金されていたことなど、檀廻の様相を詳細に分析した。

江戸における檀廻―農漁村の檀廻は「直廻」と「置札」があり、「直廻」は檀家を一軒一軒訪問し、「置札」は特定の有力檀家に札を複数枚預け、手数料を渡して配札を依頼するものである。初穂の集金は、配札を依頼した家に、村内での初穂の取り集め斗指定場所への届け方を頼み、次の村へ向かう。江戸檀廻は、江戸をどのように巡っていたのだろうか。

天保十一（一八四〇）年十月の「檀廻中手控」では、大山を出発して東海道に出る。初日は保土ヶ谷泊で、二日目に江戸に入る。三日目は宿に逗留して荷解きをする。日本橋周辺で必需品を購入して廻る。四日目（江戸檀廻初日）に両掛に配り盆・帳面・雨具・小遣などを詰め、江戸市中の檀廻に出かけ、日本橋周辺の檀廻となる。戻ると初穂を調べ、翌日入用の札（半紙包・水引は二本ずつ）山椒・箸を用意し、次の日の準備を行う。五日目（江戸檀廻二日目）の八丁堀、六日目は深川辺、七日目日本所辺、八日目は神田湯嶋辺、九日目下谷坂本辺、十日目桐ヶ谷芝辺、十一日目染井小石川辺、十二日目四ツ谷赤坂辺、十三日目麻布辺、十四日目以降は葛西檀廻（亀有・小岩など）に取りかかり、二十日目は江戸に戻る。この時は、日本橋の世話人宅に

立ち寄り、余計な物は明荷に入れ、宿に預ける。二十一日以降は下総檀廻に出て、二十八日目は舟橋亀屋に寄り、荷物は亀屋に残し、小金（現松戸市付近）檀廻に向かう。三十六日目には江戸に戻り、上総檀廻に出かけ、四十三日目に上総檀廻を終了すると、帰路舟橋亀屋で昼食を取った後、江戸へ戻った。

江戸檀廻の収入は、弘化二（一八四五）年十一月「諸手控」（村山坊）によると、江戸・下総・上総の檀廻支出は金八両百八十九文（金三両一分と三十一貫五百四十一文）に対して、収入は金十一両三百三十九文（金一両三分二朱と六十貫五百六十三文白米二升余）で三両百五十文の黒字。天保二（一八三一）年の夏季祭礼中の坊入り、収入六十兩一分一朱百七十七文に対して、支出は五十八兩二分一朱三百六十七文、差し引き一兩二分三朱二百二十五文の黒字である。

御師側の檀家認識―村山坊の天保八（一八三七）年の「下総国檀家帳」によると、村内の役の違いが檀家の格付けの違いに繋がっている。次のように御師は区別していた。

名主 大札、絵、八寸箸（二膳）
年寄・寺院 大札 八寸箸（二膳）
村方一般 小札

はし・薬（どちらか一つ）

信仰心など私的な条件により初穂が上下し、札・土産物の種類が異なる都市と村落内の役や職分により違っていた。例えば高野山桜池院の天保十五年の「配進物覚」によると名主本陣、問屋、町内年寄・町

内組頭、小前中の四段階にわけられている。

江戸では団扇や茶道具（茶焙、茶台など）農村部では薬や絵などである。江戸では、札の種類や札の upper、箸の袋の有無に露骨にあらわれている。谷山村と桐ヶ谷村では、札の包がなく、土産物の並箸の袋がなかった。農村の方が格下である。

御師の檀家保有形態—江戸檀家を重視する御師によって、農村部よりも格上の扱いを受けていた。しかし、常に檀家が消滅する怖さも伴っていた。村山坊の天保十一年と弘化四（一八四七）年の二年分の檀廻帳から江戸内を十の地域に分けて檀廻していた。

A 日本橋・八丁堀は評価も檀家数も安定しているもの、若干減少。

B 深川・本所・神田・湯嶋では、檀家数は若干減少しているが、評価に上昇傾向が見られる。

C 下谷・坂本・桐ヶ谷・芝・染井・小石川では檀家数も評価も上昇傾向が見られる。

D 四ツ谷・赤坂は、若干上昇傾向が見られるものの、全体としては檀家数を減らしている。

それでは、これらの人の職業はどうであったか。弘化四年の「江戸檀廻帳」から

商人八十 （三一・七五％）
職人百二十二 （四八・四一％）
単純労働者十六（六・三五％）
武家十二 （四・七六％）

その他二十二 （八・七三％）

七割ほどが都市中・下層民である。

檀家側の御師認識—ここまで大山御師側の史料であるが、世田谷村大場家は寛政十一（一七九九）年から文政九年までの十一年間を見ると、伊勢御師が毎年必ず来村し、これに対して五百文の初穂を納めている。高野山の塔頭には三百文と格の違いをみせる。基本的には百文と決めている。安産祈願や疮瘡祈願の依頼をしている。

奥沢村名主の原家は、寛保二年から文政五年までの五十年間は、江ノ島御師が毎年来村してきて、安定した師檀関係を築いているが、大山や伊勢御師も入り込んできている。鹿島も当初は江ノ島と同等な頻度で訪れて来ていたが天明四（一七八四）年以降は、姿をみせなくなった。伊勢御師の参人もあつて激しい競争があつた。江ノ島御師の初穂は百文と安定していた。村落には三種の御師が存在した。

主御師（毎年定期的に廻村し、最も強い師檀関係を結ぶ御師）

脇御師（数年おきなど不定期に廻村する御師）

別格御師（伊勢御師、高野山塔頭）

武蔵国橋樹郡長尾村の百姓代の鈴木家の当主藤助の日記には、文政七（一八三八）年では、

鹿嶋様御師 御初尾 十二銅
御嶽山御師 御初尾 五合余
御狗拜借料・冬廻り引替 米
一升
夏廻り小麦一升

天保七年には、

大山御師・富士山御師・江之嶋御師・喜教院

夏廻り小麦 冬廻り米

榛名山御師 冬廻り米

都市型参詣における御師の役割——江戸檀家廻は日本橋の世話人宅を基点として、毎年ほぼ決まった行程で行われていたものの、檀家の無断引越や初穂の拒否等の理由により、収入は安定せず、檀家が優位の状況であった。それにもかかわらず、御師の収入が全体としては薄利であった。そのため、檀家の増加を望むことができる江戸は、御師の経営戦略上重要な地域であった。都市の最大条件として、御師がこまめに檀家を廻ったことをあげなければならない。都市では、毎年個人宅を訪問して、檀家としての継続の有無を確かめなければならない。これを怠れば、他の御師などに奪われ、あるいは引越などで行方が分からず檀家を失うことになる。宗教の近世的展開を成り立たせていた一つの要因は、御師をはじめとする宗教者の積極的な檀家廻であったといっても過言ではない。

近世に入り、檀家は拡大したが信仰的絆は減退したと新城常三は指摘した通りである。

九、熊野先達・檀那と御師

鎌倉時代になると、皇族や貴族に限らず地方の武士たちも熊野に参

詣するようになっていった。先達は道中の道案内、関所、渡船、宿泊などの世話を行った。また大阪や伊勢からの熊野詣道に入ってから、熊野王子などの霊地で拜礼や垢離などの導師を勤め、帰路・帰還後の作法を取り仕切った。さらに先達は参詣をなしない人の喜捨を熊野にとどけたり、熊野山の僧供米を集めたり、勧進にあたることも多かった。熊野に参詣したり寄進する人を檀那と呼んでいる。

熊野には、檀那や先達を受け入れ、宿泊、祈祷、山内案内に従事する御師がいた。先達は檀那を熊野に導くと、御師宛てに檀那の在所、氏名、自己の在所、名前、提出年月日などを記した願文を提出した。願文は本来、檀那が先達・御師を介して熊野権現に祈願してもらう祈祷の依頼状であった。しかし、檀那・先達と御師との結びつきが恒常化すると、三者の関係は師檀関係と呼んでいる。

【地域別先達・檀那の年代推移】第六表 鎌倉後期より安土桃山

先達

東北六十八 関東百二十三 中部七十八 近畿二百六十

中国六十三 四国百二十七 九州二十九

檀那

東北百二十四 関東二百五十一 中部三百十 近畿三百九十五

中国百十四 四国百五十九 九州七十二

檀那では近畿・四国・関東・東北が比較的多く、九州・北陸・山陰が少なく、東日本と西日本がほぼ同じ、先達は近畿・関東・四国・東北・山陽が多く、全体的には西日本が多くなっている。檀那に対する

先達の数は、近畿・四国・山陽が多く、この地域で特に先達が活躍していたことが推測される。

熊野修験は全国各地を遊行し、地方霊山や地方の社寺に客僧として住み込み、その僧侶、神官、その他の武士やその下人さらに俗人を熊野に導いた。熊野先達は熊野に着くと檀那と連名で御師に願文を提出し、師檀關係を結び、それ以後は常にその御師に依存した。先達や檀那は御師の財産とみなされ、相続・財産・借銭の質物になった。先達は当初は地方の社寺に奇遇した熊野修験だったが、やがて各地の社寺の修験が勤めるようになったこと、先達は念仏聖、六十六部、陰陽師、巫女、俗人など多様なものが含まれていたことなどが認められた。こうした熊野詣の盛行もあって、全国各地に熊野権現が勧請されていった。⁽⁸⁵⁾

註

- (1) 「ホテル業の市場規模の推移」財団法人社会経済生産性本部（『ジャーナル白書―余暇需要の変化とニューツーリズム―』二〇〇七年）
- (2) 『草津宿本陣』草津市教育委員会、一九九五年
- (3) 『観光・旅行用語辞典』北川宗定編、ミネルヴァ書房、二〇〇八年。国土交通省所管の社団法人である。一九四八（昭和二十三年）十二月に発足し、一九五三（昭和二十八）年三月に認可された。
- (4) 註(3)参照。一九五〇（昭和二十五）年に「国鉄推薦旅館連盟」として発足し、一九五三（昭和二十八）年に認可され、一九五七（昭和三十一年）年所が現在の名称に改称された。日本旅館を世界に紹

介し、国際区御流を深めるために組織された。

- (5) 註(3)参照。「全旅連」は、旅館・ホテル営業における衛生施設の改善、向上。衛生水準の維持向上を図っている。前身は、一九二二（大正十一年）年に結成された全国旅館組合連合会
- (6) 「浪華組道中記」江戸吉田屋又三郎他、大阪商業大学商業史博物館蔵、一八四四年
- (7) 「難波巡覽記」大阪河内屋太助、大阪商業大学商業史博物館蔵、一八四一年
- (8) 「浪華名所独案内」大阪商業大学商業史博物館
- (9) 『交通史』体系日本史叢書24、豊田武・児玉幸多編、山川出版社、一九七八年
- (10) 「単身赴任下級武士の幕末『江戸日記』」林英夫校訂、『地図で見る新宿の移り変わり（四谷編）』東京都新宿区教育委員会、人文社、一九八三年
- (11) 「江戸お供の記」弘化四年（一八四六）高知県山田町教育委員会編『土佐山田町史料』第五巻、一九七九年
- (12) 『日本人と参勤交代』コンスタンチン・ヴァポリス、小島康敬、M・ウィリアム・スティール監訳、柏書房、二〇一〇年
- (13) 井原西鶴「世間胸算用」、『西鶴集 下』野間光辰校注、岩波書店、一九六七年
- (14) 十辺舎一九「東海道中膝栗毛」（岩波古典文学大系62『東海道中膝栗毛』、校注者麻生磯次、岩波書店、一九五八年）
- (15) 『修験道』宮家準、講談社、二〇〇一年
- (16) 『神仏習合と修験』田邊三郎助、新潮社、一九八九年
- (17) 『日本の美術No.530』近世の寺社建築「監修独立行政法人国立文化財機構」ぎゅつせい、二〇一〇年
- (18) 『出羽三山信仰の圏構造』岩鼻通明、岩田書院、二〇〇三年
- (19) 水津一朗「地域の構造」大明堂、一九八二年
- (20) 文化庁編『日本民俗地図Ⅲ（信仰・社会生活）』国土地理協会、一九

七二年

- (21) 註(16)を参照
 (22) 註(17)を参照
 (23) 註(16)を参照
 (24) 『山岳宗教史研究叢書13』「英彦山と九州の修験道」中野幡能、名著出版、一九七七年
 (25) 註(24)を参照
 (26) 註(16)を参照
 (27) 註(16)を参照
 (28) 註(17)を参照
 (29) 註(16)を参照
 (30) 註(17)を参照
 (31) 『熊野修験』宮家準、吉川弘文館、一九九六年
 (32) 註(17)を参照
 (33) 『参宮の今昔』大西源一、神宮文庫、一九八六年
 (34) 『お伊勢まいり』西垣晴次、岩波書店、一九九二年
 (35) 『おかげまいり』と「ええじゃないか」藤谷俊雄、岩波書店、一九六八年
 (36) 「吾妻鏡」(『国史大系』黒板勝美、国史大系編修会編、一九六四～六五年)
 (37) 「犬筑波集」(『竹馬狂吟集・新撰犬筑波集』木村三四吾・井口壽、新潮社、一九九二年)山崎宗鑑のものに次々と増補されて異本が多く、収録内容も多様である。
 (38) 『精選 日本民俗辞典』福田アジオ他五名、吉川弘文館、二〇〇六年
 (39) 註(33)を参照
 (40) 註(34)を参照
 (41) 註(35)を参照
 (42) 註(17)を参照
 (43) 井原西鶴「日本永代蔵」(『西鶴集 下』野間光辰校注、岩波書店、

一九六七年

- (44) 井原西鶴「西鶴織留」(『西鶴集 下』野間光辰校注、岩波書店、一九六七年)
 (45) 『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』新城常三、塙書房、一九八八年
 (46) 註(45)を参照
 (47) 註(45)を参照
 (48) 註(45)を参照
 (49) 「本朝世紀」(『国史大系』第九巻、黒板勝美編、吉川弘文館、一九九九年)
 (50) 「甲斐国志」(『諸国産物帳集成』第二巻、安田健編、科学書院、一九九九年)
 (51) 『富士講の歴史』岩科小一郎、名著出版、一九八三年
 (52) 『富士講と富士塚』神奈川大学日本常民文化研究所、平凡社、一九九三年
 (53) 『富士山吉田口御師の住まいと暮らし』外川家住宅学術研究会、富士吉田市教育委員会、二〇〇九年
 (54) 『勝山記』松平定能編、師安年間(五六四～)～永禄六(一五六三)まで書き継がれた。
 (55) 『富士の信仰遺跡』富士吉田市歴史民俗博物館、富士吉田市教育委員会、二〇〇二年
 (56) 註(52)を参照
 (57) 『身祿の聖物』富士吉田市歴史民俗博物館、富士吉田市教育委員会、二〇〇八年
 (58) 註(52)を参照
 (59) 註(38)を参照
 (50) 富山道治「竹齋」(『竹齋』前田金五郎・森田武、岩波書店、一九六五年)
 (61) 『富士案内 芙蓉日記』野中至・野中千代子、平凡社、二〇〇六年
 (62) 註(61)を参照

- (63) 「三十一日御巻」(『身祿の聖物』富士吉田市歴史民俗博物館、富士吉田市教育委員会、二〇〇八年)
- (64) 註(51)を参照
- (65) 註(52)を参照
- (66) 「吉田の御師」(富士吉田市歴史民俗博物館 企画展 解説シート 一九九八年)
- (67) 註(66)を参照
- (68) 註(66)を参照
- (69) 註(51)を参照
- (70) 註(66)を参照
- (71) 『江戸庶民の信仰と行楽』池上真由美、同成社、二〇〇二年
- (72) 「御祭礼中諸収納控帳」村山八大夫、寒川文書館、一八三一年
- (73) 『靈山巡詣—立山にみる遊・憂・悠』立山博物館、一九九五年
- (74) 「日本九峰修行日記」泉光院野田成亮(『日本庶民生活史料集成』二巻、宮本常一他編、三二書房、一九六九年)
- (75) 「越中志徴」上巻下巻(『富山新聞社』石川県図書館協会編、一九五一年)
- (76) 『もつひとつの立山信仰』立山博物館、一九九二年
- (77) 「荘厳講執事帳」宝治二年(一一四八)から慶応四年(一八六八)六〇年間荘厳講の執事当番名を記したもの。
- (78) 「三禅定之通」盛田久左衛門、延宝四年(一六七六)盛田家は鈴谷村の庄屋を勤め、醸造販売、廻船業で財をなした。同家に伝わる大量の古文書は財団法人鈴漢学術財団により管理されている。
- (79) 『研究紀要』「富士山・立山・白山の三山禅定と芦峯寺宿坊家の檀那場形成過程」福江充、立山博物館、一九九三年
- (80) 註(14)を参照
- (81) 『研究紀要』「芦峯寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と「立山信仰」の展開(1)」、福江充、立山博物館、二〇〇八年
- (82) 『社寺参詣の社会経済史的研究』新城常三、塙書房、一九八二年
- (83) 浅香幸雄「大山信仰登山集落形成の基盤」(『東京教育大学地理学研究报告』、一九六七年)
- (84) 「相州大山講の御師と檀家—江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐる」田中宣一(『日本常民文化紀要』、一九八二年)
- (85) 註(31)を参照

